

月夜

近所の百姓家から

「御湯にお入りなさい」

と戸のそとで聲をかけてくれた
子供が

「父さん僕も一緒に入るよ」

と尾いてくる

戸を開けると

静かな秋の月夜である

見渡す限り

村の家々はしんとして

月光の中に遠い山脈もうつすりと見へ

島の方には狭霧がこめて煙つてゐる

前の桐の木がから／＼になつて

疎らに残つた葉が

月夜の空にぶら下つてゐる

道へ出ると

下駄の音がカラコンと響く

子供が案内するやうに

先に立つてその百姓家へ

元氣な聲で「おばさん、父さんが来たよ」と
飛んでゆく

その家ではカタコンくと機を織る音がしてゐた

新らしい頁

毎日、毎日

自分は新らしい頁をめくる

そこに何か書きつける

何も書けない空白の日や

詩が十も二十も書けた日や

新しい頁をめくる喜び

今日こそはいゝ詩に恵まれよ

一つの星

一つの星が

早くから出て

皆んなの集るのを待つてゐる

今夜は不入りかなと思つてゐると

いや、出た、出た

素晴らしい大入繁盛

皆んなの熱心に感心する

いや賑やかなこと

今が出盛り

大陽氣に空が揺れかへる

一寸したことで

一寸したことで

すぐ悦ぶ

妻や子供だ

悦ばしてやりたし

悦びを與へる

悦びを與へる

喜び

静かな晩

静かな晩だ

波の音も今夜は低くて

ほとんど聞えない

非常な風ぎだ

實に静かだ

空には月が照り

晝間のやうに

澄んで明るい

こんな静かな明るい晩はめづらしい

永遠の懷ろに抱かれてるやうな

落着いた澄んだ晩だ

世界の大きさを感じる晩だ

星が遠くに嚴かに

美しく輝いてゐる

肅として夜は晴れ

月明の夜は實に清く、美しく
静かに涙ぐまれて來るいゝ晩だ

秋の消息

友よ

私は昨日田舎へ來ました

思ひつくとすぐ此處へ來たのです

私は來てよかつたと喜んでゐます

今私は秋の最只中に

限り無い健康に漲つて

この莊嚴な季節の與へるよろこびに酔つてゐます
友よ、私は君にこの秋を見せたいやうです

獨占してゐるのが氣の毒のやうです

峰と云ふ峰、谿と云ふ谿は

もう莊麗な壁畫の完成に近づいてゐます

實際今が見頃です、もう僅かでこの美は消されてしまふのです

この二三日天氣が續いてくれる事を痛切に祈ります

私はその間に山から山、谿から谿を馳け廻るのです

何と云ふ雅致に富んだ秋でせう

私はこの季節の美が慣はしになつて

もう毎年これを味はないと

一年中不愉快に感じるほどです

健康なものにとつてまつたくこの季節は

味ふに足る一年分の滋養をもつてゐるやうです

私は妻を伴つて、優しい林間の逍遙を

楽しんでゐます

一年中の私の御祭です

私はゲーテのやうに葡萄酒をたづさへてゆくのです

然うして最後の太陽を祝別するのです

友よ、秋は自然が特に詩人に恵んだ季節ではないでせうか

さう云つて見たくありません

私の妻も健康で魅力に充ちてゐます

二人が山中でどんなに楽しく語りひ

俱に喜びをこの美しい秋の中で分つてゐるか

君に見せたいやうです

秋

秋が來ました

二人の散歩の道々が

もう秋の葉で莊嚴に飾られて

妻の姿が特別に愛らしく

二人の御機嫌が頗るいゝ秋の散歩路となりました

毎年二人はこの秋を祝ふ慣はしです

紅葉は二人の戀の火を朗らかに彩つてくれるやうです

林を渡る角笛のやうな風の音の爽やかさ

はらくくと二人の上に散る木の葉の黄金の時雨

二人は陶然として歩むのです

まるで私達の通る道を

秋は蒔い好みで飾つてくれたやうです

秋

妻よ

おまへの御機嫌のいゝのは

私にとつてどの位楽しく嬉しうか

おまへのほそい手をとつて
静かな秋の道を

幻のやうに彷徨ふのは

どんなに満ち足りた健康の喜びか

黄金のやうに燃える林や彩られた蒔い道草を踏み乍ら

二人の語る言葉は

祈りのやうに情熱に充ちて痛切だ

あゝ楽しい秋の山道を

おまへの手をとつて恭しく歩くこの俺は

何と云ふ幸福な男だらうね

小學校の側を通つて

小學校の側を通つて

フト脊のびをして窓から覗くと

暗い教室に可憐な子供等が

教壇に立つた先生の方に

尊敬と愛の念に満ちた

無邪氣と喜びに輝く顔を向けて

四五十人ばかりをとなく黙つて

皆んな視線を先生に集めてゐた

黒板の前に立つた瘦せて脊のヒヨロ／＼した先生は

何か楽しいお伽噺でも話してゐるのだらう
 我れを忘れてその幼い教へ子達に愛と教訓を熱心にさづけて居た
 自分は貴い光景に思はず泪をボロリと落した
 私は感激に燃へて
 「さうだ、さうだ」と獨り頷つき乍ら
 野の方へ楽しく歩いて行つた

落日

秩父の嶺の上に

まつ赤な太陽が今日の旅を終へて
 火を噴くやうに焰々として

煮へくり返つた

莊重な勇ましい姿をして

山岳の上でぐる／＼廻轉し乍らたゆたつて居る

何と云ふ奔放な偉大な姿だらう

眩ふしくて見てゐられない

急に山々の色が紫に染まる

私はこの夕ぐれの山々にも感動する

縦走し横匍する山々の跳躍!

その形態の神秘的な奇しき變化の奔放さ

太陽が沈むでも

未だツアイライトが

青銅の山々のうしろに

大橙色に巾廣く照り返へしてゐる
 その色の聖らかさ
 奇異な、野性のまゝの喜びが
 私を驅り、私は新鮮な大氣を浴びて
 喜悅に叫んで奔馬のやうに飛び廻る
 然うして夜は平野と山岳の上に
 優しい安息のシンボルのやうな星を生み初める
 一つ、二つと数は順々にふえてゆく
 私はその時心から歌ひたくなる
 グレイの戀しい挽歌のやうな
 天の父の親はしく
 地の万物のいとほしい

優しい祈りの歌が
 この安息と平和に満ちた
 廣大の天地に響かしたくなる

秋の山林

秋の山の中
 森は今善美を盡して居る
 實に、氣儘な色彩を着けて居る
 まるで雄大な森の宮殿を巡覽してゆくやうだ
 太陽は奥深い森の中までさし込んで
 遠い霧の中から透かして見える森林の美は

目を驚かすばかりだ
大膽な樅、奔放な松

情熱的な放肆な氣儘な華美な衣裳をつけた山毛櫸
黄ろい寛衣をゆるやかに着こなしたやうな篠懸の木
奇しきまで立派な紅葉は並びなく美しく
轟々と立つ松の蔭から

颯颯のやうに美しく悠長な姿で舞つてゐる

そこにはあらゆる誇張と豊富と過剰がある

言語に絶した變化と屈折と奔放の形態と色彩がある

私は驚異の眼を瞪るばかりだ

冬の夕暮

夕暮の澄んだ微光の中に

静まり返つた原の中に

枯木が安らかに五六本立つてゐる

幹と枝とが實にやさしく

少しも動かすいゝ姿勢で

暮色の中に溶け入りさうに立つてゐる

その氣品!

池

ふと通りかゝつた
 小さい池を見ると、静まつた水底に
 冬枯の木々が五六本倒影してゐた
 葉のない織い枝々が夢幻的に纏れて
 深い静かさの中に、眠る様に沈んで居た
 自分は引き入れられる様に見て居た
 何と云ふ静かさ
 何と言ふ氣品

静かな日

今日も安らかに日が暮れてゆく
 風が無く
 風ぎ渡つたやうな天地の静かさ
 見るものに皆んな氣品があり
 その立派さ、美しさ
 此世のものとも思へない

山々

山々のあの氣品

樹木のあの氣品

自然の清らかさの中では

どんな塵でも、物質でも

その清らかさに包まれて

氣品のあるものに見へるのは驚く

冬の景色

冬の景色は實に好きだ

枯木の姿の安らかさ、静かさ

枯草の色、静かな道

ものゝ不動な眠るやうな静かさには

春や夏に見られない

それに決して劣らない氣品がある

静かな道に歩む人の足音は、静かな道に響く。

世の知らない高い事を知れる人

世の知らない高い事を知れる人
 かゝる人は常に神秘に住し
 低き世の進むことに耳を貸さず
 只己の信じ與へられる道を高く進み
 此世よりは忘れられ
 されど自らは心樂しく
 遠き世界へと旅立つ
 我れかゝる人を尊敬し
 かゝる人にあやかると願ふ

毎朝

自分は毎朝眼を開き
 毎晩眼をとぢる
 自分の眼は見えざるものを見
 自分の心は戦き、且つをどる
 自分は神秘の中に生きるもの

知らざる事

知らざる事多く
見ざる事廣し
我が心よ勵め

内にもものを聴き

我れ、内にもものを聴き
内にもものを見

外にもものを見ず
外に聴かざるやう努むべし

星

星を見て
我が心は狂ふ
不可思議の美なるかな
汝、星よ

ハムレットよ

ハムレットよ
 エルシノアの野にて
 汝が父の亡霊を見し夜も
 かゝる朧月夜なりしか
 萬象、静まりて、聲なく
 異様なる夜なるかな
 刻限も、かゝる凄き真夜中なりしか
 我れかゝる刻限を愛す
 氣澄みわたりて

身に泌むごとし宇宙の神秘

カント

カント
 ベエトウベン
 レンブランド
 シェクスピア、ゲーテ
 エマソン
 ホイツトマン
 ショウベンハウエル

ニーチエ

かゝる人は皆天人なり

かゝる人は此世に来て

天使のごとく働き

此世に寶を残し

遠く再び凱歌を擧げて天に歸りしもの

我れかゝる凱歌を擧げて

此世を引きあけし人を讚美す

かゝる人は地上に於ても亦不死なればなり

天上に於ては神のごとし

星

星は登り又沈む

煌々として澄みわたる宇宙を

神

いづくにか

居ますが如し

小さい汽船

針のやうに小さい汽船が
 月明の大洋を進んでゆく
 大宇宙の力強い神秘の中を
 煌々たる星の嵐の中を
 靜かに、決斷ある態度で
 何日も何日も陸を見ないで

冬の夜の嵐

冬の夜の嵐を聴いてゐると
 ふと思ひ出した

エルケーニヒ

どこかに凍へた子供を抱いた父が
 馬に騎つて韋駄天に走りゆくさま眼に浮ぶ
 風は彼をとりかこんで怒號し
 呻き、叱咤するやう

哀れな父子の叫びが

諸天使の働き立つ聲の中に

一際鋭くきこえるやう

冬の星

底しれない深さの中に

爛々として燃える星は

天馬の眼のやうに

鋭く深く決然として輝いてゐる

天地を睜る眼のやうに凄く美しい

朝寒の山

朝寒の深紫の山々よ

深い縦の襞に

雪が幾筋も白い瀧のやう

風は天から吹き落ちて

底しれない太氣の中に凱歌をあける

同一回歸

萬物が靈である、大地は靈である
 形あるものも靈である、形なきものも靈である
 奇蹟は我等を繞つてゐる

凡てのものは同一の根元に歸る
 靈へ回歸する

秋の山で汝の見た薄も尾花も
 汝が楽しんだ秋も夏も消えて
 どこへ歸つたか

あの美しい花はどこに消え

あの美しい緑の葉はどこに朽ちたか
 凡てが同一の根元へ返る

萬物皆同一の靈へ回歸する

異なる外觀もてる他人も、又汝と同一なものである
 汝もいつか靈魂は天へ

汝の肉は地に回歸する

同一なるもの、我れをめぐり
 異なる形を成せども

凡ては一つの精神より生され
 一つの精神に統御されるであらう

神

神！

神は一にして

全體である

自然は豊富である

萬物は形ち異りて

肉眼には差別あれども

歸するところは同一の靈である

冬

冬は今誇らしく嚴かに

夏の威力に劣らない

偉大な威力を俺達の上に加へてゐる

地球は悲運の時の姿で

月と星と三人で

寂しい偉大な寒い夜を廻轉してゐる

海

少年は母と海を愛す

横濱

ホテルの屋根から

暖かさうなストーブの煙がのほる

その中には金や贅澤な甘味さうな肉があるのだらう

金満家のサンフランシスコの紳士が

美しい女優を連れて泊つてゐるのだらう

俺は腹の減つた貧しいバガボンドの日本の詩人

海を見乍らベンチに凭れて

金持さうな異人が

響りの強い葉巻をくゆらして楽しさうに通るのを横目で眺めてゐる

胸にしみるやうな華美な粹な姿の婦人の

細い靴の踵を見送る

トントンと愉快にホテルの石段の中へ消えてゆく

ホテルの内部は富と贅澤なベッドと甘美しい肉に満ちてるのだらう

海
よ

海よ

御前を思ふと

少年の日の楽しい幻が眼に浮ぶ

冒険の氣性に富んで

海外に憧れた時代の可愛ゆい俺を思ひ出す

少年の日に俺の眺めた人生も

海のごとく洋々として

希望と情熱と美に充ちてゐた

おゝ海よ

俺は舟を愛した

新しい汽車が楽しかつたやうに

港の汽船を見るのは楽しかつた

異様な楽しい憧れと幻を

御前の姿を見ると小さい胸に湧かし

南の富んだ孤島や椰子の樹や鸚鵡や

寶石や星や虎に憧れたものだ

あゝ滅び去りし夏の日の夢よ

自分は

自分は完全の人間ではない
 自分には長所も短所もある
 自分は自分の長所ばかり誇張して考へまい
 自分は強い意志や鋭い智力のみでなく
 自分の弱い情も、又他の缺點、短所も忘れたくない
 自分は人間の美しい長所を讚美する
 自分に無い他人の美點や長所を尊敬し
 それを自分も得たいと思ふ
 けれども自分は自分の弱點、短所があるから

雲

私は何か話しかけたいが

雲

自分の長所が崇高のものになるのだと考へる
 自分は弱點のみを誇張せず
 自分の罪は素直に悔ひ改め
 自分の長所を生かす事に努めよう
 自分は自分の長所を誇張しまい
 同時に弱點を誇張する事もやめよう

彼は沈黙してゐる
懐しい不思議な雲

温い田舎

温い田舎を

のびくして歩く

沈黙した天の青さ

沈黙した林の静かさ

ムダな饒舌りに飽きて

獨り黙つてゐる事の好きな自分には

實に楽しい散歩だ

俺の詩

人間にきかしてもわからないから

自然にきかせて遣らう

俺の詩

田舎で

夜の眠りを妨げるものもない田舎
 静寂の中で何と深く眠ることか
 きよらかな、楽しい眠りに沈むことか

霽

夜、戸外に

枯木にたばしる霽の音の凄さ

書齋でちつときいて居ると

冬の仕業が嚴として感じられる

ねじけ者

私は救はれない罪人だ

神聖な法則を破つたねじくれ者だ

敬ふべきものを敬はず

愛すべきものを愛さなかつた

恥に塗れてゐる人間だ

友情に反いたり愛を破つたり

神の禁じたものを乱した者だ
平和を争闘に

愛を憎悪に替へた悪者だ

心霊より肉體を重く愛し

他人より、利己を愛した悪者だ

天地間の嚴かな正しい法則の存在を

認めなかつた大きな悪を成したる者だ

私の内に嚴かな神の法則が

働く事を感じる時

私は嗚咽して悔ひ嘆く者だ

手と手

人と人は氣の附かないところで

結び合ひ、よろこび合つてゐる

手と手を握り合つてゐる

或者は偽りの手と手を

或者は離れ難くその手と手を

山頂の雪

昨夜から泊つた友と
 雪を見に山へ登つた
 自分が元氣になつてゐる故か
 登る道々に見る森の中の樹々が
 冷たい雪と寒い空氣の中で鋭く鮮かに
 研ぎ磨かれたやうに長い枝々が澄澗として
 縦横に組み交し
 雪に班らな熊笹の中から立つてゐた
 山頂へ登りついたが

濛々とした水蒸氣で麓の景色は思つたほどでなかつた
 然し山頂の雪のきよらかさには驚いた
 赤松がニョキリと逞しい赤い幹で
 火が出るやうに健康な幹の色をして立つてゐた
 見上げると傘のやうに蒼んもりと
 雪の積んだ枝々が神秘に明るく
 房のやうに垂れた葉が、織い葉が一本一本
 氷つて、透いて見へる美しさ
 自分は驚いてその木の周りを歩いて讚嘆した
 きよらかにさつぱりと飾の無い松が
 銀の星の飛び出した冠を戴いて
 得意然と立つてゐる美しさ

自分が見上げて喜べば喜ぶほど

彼は美しいを増して行くやうに見へた

松の木はその位にしてフト側を見ると

そこには又冬中は休んでゐる掛茶屋が

神秘的な静かさに不思議とキレイな館と變じ

又その側には若木のさくらやつゝじの姫君の御供の衆が

これは又團子のやうな綿雪の帽子をかぶつて

細い枝々が蘭玉のやうに

どこか艶な姿をして黙つてゐる

と驚いた事に

どこに潜んでゐたのか二十羽近い群れた小鳥が

啼く音はきかせず、一齋に羽音をバツと立てゝ

雪の松の葉の間から

飛び立つたので

雪が滯れて

すぐもう姿は見へず

山の上はしんとして神秘的な雪の夢幻劇の舞臺になつて了つた

元日に

田舎らしい静かな正月をした

家の前の蕭條とした原を

晴着を着た娘や村の若者が靜かに楽しさうに逍遙してゐた

子供等は静かに曇つた空へ風を揚げて居た
 風を揚げる事でも子供等には一仕事らしく見えた
 揚がると子供は喜びの聲をあけて居た
 空は白く曇つて雪か雨が降り相で降らず
 風もなく、温かで、穏やかな元日だつた
 遠くには雪の山が晴れて静かに見えてゐた

冬の道

寂しい人ツ子一人通らない
 田舎道

石ころと落葉とを踏んで
 杖をふりく通る
 何の魅力も飾りもない
 しかし健實で、さつぱりしてゐて
 大地の固さを感じて
 大いに愉快になる
 うるさくないのと單調なのが
 自分の心を休めてくれる

俺の子

俺の子は

静かに遊んでゐる

友達がなく一人で

餘り静かなので

出て見ると家の裏の

静かな温い日向で一人で

土いたづらしてゐる

何か獨言を言ひ乍ら

涙ぐむ

子供

子供よ

幸福に楽しく生きよ

父は苦しむすぎたけれど

御前は楽しく生きてくれ

小景

峰の上に冴えた月が光つてゐる

蜂の樹木が鐵のやうに生へ
山の姿は月光の中に緊張して嚴かだ

日の出

日の出の喜び

滿地の霜に映じて

りうくと太陽が救ひ主のやうに

地の果てに現はれる時の神々しい靜寂

小鳥の讚歌が林や空にたへ難いよろこびの歌を洪水のやうに流す時
自分は心も革まり

何か嚴肅な、歎ばしい
敬虔の念に、心樂しく亢奮する
神秘的嚴肅な、喜びが
自分の身軀にも傳はるのを感じる

冬の日暮

雀が屋根の罅に

入つたり、出たり落着かない

冬の日暮の淋しさ

冬

松は緒く、熊の毛のごとく
 松の葉は青くするどく
 天は木の間に寂しく冴ゆ

冬

小櫓の枝に残れる葉寂しく風に鳴り
 白き羽を見せて頬白飛び

頬白も珍らしくなければ
 ステッキにてねらふ真似等する

冬の月夜

真夜中に家を出て見た
 明淨極りない月夜である
 今は全く寒氣と時刻が
 田舎の風物を凍らして
 鋭い月光の裡に地上の生物は眠り亦死んでゐる
 地は霜に厚く包皮されて變貌し

濛々として降る霧は白い渦を宙に巻き
 遠く月光の裡に雪の山々が
 妖霊めいて彷彿と連り
 尙降りしきるらしい白雪の中に
 異様な眞紅の星が燃えてゐる
 何と言ふ凄まじい憑れたやうな美だらう
 私は森殿の氣に包まれて
 無窮の天を仰ぎ、沈黙した地を眺めて戦いた
 私は雪の山々を再び見る勇氣がなかつた
 全くゾツとするほど凄
 併し月は傲然と振り返つて輝き
 麗はしい星は彼の周りに繞集し

崇高なブレークの月と星とである
 私は死の白夜の中に立つて
 光りに接したやうな喜びを感じた

子供の時

私は子供の時
 よく神社の境内で遊んだ
 手洗殿の、大きな石の手洗の側で
 そこにある木の小さいひしやくで
 水を汲んでは落して遊んだ

然しその手洗には水がいつも乏しかった
 御祭の日にしか水は湛へられなかつた
 いつも御祭の日の残つた水が
 少しばかり、底に残つてゐて
 そこには子子が湧いたり、落葉が沈んだり
 さびた穴開き銭が落ちて居た
 私は石の底を掻き廻しては
 水の乏しいのを嘆いたものだ

夜の日

河原の洲の中の

水溜りに

小さい魚が力なく泳いで居た

冬の日

木枯

木枯の季節と成つた

冬ざれた道の白さ
刺すやうな寒さ
自づと足が急れる

冬の情景

ブラットホームに枯木が二三本
平原の中の冬のステーション
乗る人が自分ひとり
寂しい枯野の景色を見乍ら
汽車の来る方に耳を澄ます

霜月夜

すさまじい霜月夜
空気の綺麗さ
月光に氷つた木々の
尖つた枝がバリ／＼してゐる
池には氷が張つてゐるだらう
空も地面も静かで
玻璃のやう、星が滴るばかりに光る

星

玻璃のやうな明淨な空
星が液體のやうに
地に近づいて見へる

星

空が、星をぶら下けてゐる
爛々と輝いて、地に近く

冬の月夜

ハムレットが
父の亡靈を見たのは
こんな晩のこんな時刻ではなかつたか
靡ろな冬の月夜

冬

冬だ

温く暮らしたいね
平和に幸福に
寒い風等どこを吹くと云ふ顔をして
埃は浴びたくないね

冬の夜

冬の夜、風の音をきく
海を思ふ
海には遠きところだが
あの風の音は

波を思はず
風の中には整調がある
しづかに吹くな

自分の愛す詩

自分は愛す
電光の如く輝き出る詩を
撰擇の隙なく
滾々と興に乗り
輝き光りつゝ湧く泉

たしかにある光りが
 液體のやうな光りが
 文字にからみつく
 をのゝく如うな激動に
 稍々畏怖を感じる思ひ

見へざるもの

見へざるものを

自分は見る

きこえないものを

自分はきく

汽車

山の上から見てゐると
 小さい黒い汽車が
 畠の中を走つて来る
 山の上まで遠くゴコ／＼きこえる
 乗つてゐる人があるのだなと思ふ
 一寸嬉しくなる

天人

我らの中に

天人あり

我ら愚にして無智ときはめ

その人の爲す事を畏敬せず

その人天に旅立ちてより

遽かに狼狽して

敬はざりしを悔ひても及ばざるべし

悲しい晩

悲しい晩だ

いろ／＼の事を想ひ出す

悔ひの天使が

私の胸を訪れ

私にもつと力強く

もつと正しく生きよとすゝめる

或時

井戸へ菜を洗ひに行つてゐる妻が
慌たどしく歸つて来て

前垂で手を拭き乍ら

役場へ税金を拂ふのを忘れてゐた

「今急に思ひ出した」と立ち騒ぐ

「さうだつたね」と私が云ふと

「あなた知つて居たの」と少し聲を強くする

「そんな日限まで知つてるものか」と私は笑ふと

「廿五日までだつたのだ、覺へて居ようと思つて、忘れちやつた、困つたね、罰金とられ

るんでせう」と机の抽斗から

その役場の書付けを探し出し

鏡の前へ行つて急いで髪を撫で付けて

それから私のところへ来て

「私一寸行つてくるわ、御金下さい」と云ふ

一圓七十錢持つて、彼女は

表に遊んでゐる末の兒を

「Kちゃんく」と呼んで一緒に出てゆく

私は障子を開けて

「をい〇へ廻つてマダムボワリイを返へして貰つて来てくれ」と頼む

「フローベルのボワリイ夫人だ、俺が借した本と言へばわかる」

「フローベルのね」妻は行つて了ふ

そこへ長男が學校から退けてくる
もうそんな時間か

かばんと畫洋紙入れを肩からかけて

黒い毛糸で縫つた辨當袋をぶら下げ

長靴をはいて

赤い汗ばんだ顔をして元氣なく歸つてくる

「くたびれてしやうがない」と上り口にぐたりとして室へ上るのも面倒臭ささ」

「暑いんだ、羽織をぬいで……」と私は注意する

スポーツのシャツを二枚重ねて着て

その上にカスリの綿入、綿入羽織

いつでもこの兒は厚着で

肩がつまつたり、からだか重くて疲れ易いのだらうと思ふ

幾度注意されても直さない

肥つてる様に見せたいのだ

學校で「デブ」と呼ばれるのが嬉しいのかもしれない

彼は靴と畫洋紙入れを柱の釘にひっかけ

辨當を疊の上へ投げ出し

羽織をぬいで、座つて、ボンヤリ息をついてゐる

自分は二疊の室へ入つて机に向つてゐると

「遊んで来るよ」と出かけた

「疲れるぞ」と自分は壁をかけたが行つてしまつた

と又戻つて来て

「十銭くれない」と障子を開けた

又かと思つて、机の抽斗から墓口を出して見ると十銭と五銭と二つころがつてゐた

「何買ふんだ」ときくと

「うん何でも……」と返事が甚だ曖昧なので

「五錢でいゝだらう」と云ふと

「七錢くれない」と云ふ

「何でもいゝなら、五錢で澤山だ」

「五錢の外、大きいお金なの」と裏所へ出て手でも洗ふのか、洗面器の音がしてゐた
自分は自分のうしろへ白銅を置いた

「貰つてゆくよ」と彼は入つて来て持つて

「行つてくるよ」と出て行つた

何か唄ひ乍ら、長靴をボカ／＼させて

自分の居る室の窓の下の道を通つて行つた

「オーイ」と急に誰かに元氣に聲かけた

向ふでも「オーイ」と返事した、道に砂利を踏む音がした

「誰だらう」さう思つて、腰を浮かして

窓の腰硝子から覗くと

向ふの畠の側の道を、Oの家の番頭が女房と公園の方から歸るのであつた

夫婦ともニコ／＼して、彼の方を見乍ら歩いて行つた

彼の姿は自分のところからは見へなかつた

そこは家の脊ろからダラ／＼低くなつて

向ふの道へ出るのには

一寸谿があつて、その丸木橋を渡つて又少し登るのだ

番頭さん夫婦は先きへ行つて了つた

そこに横肥りの彼の姿が道の上に浮び上つた

自分は腰を下ろしたが、泪ぐんで了つた

小景

平野と山岳の中の

寂しい町の停車場

暗い燈火の中に寒さに震へ乍ら

汽車の出發を待つ人達

外套、襟巻、古い頭巾

懐ろの暖さうな人、貧しさうな人

ものに關はない百姓、官吏、商人、女房さん、少女、御召のコートを着た中年増

雑多な浮世の十二月の人々

皆んな黙々として時間の早く經つのを苛々と

氷を解かせ

氷を解かせ

氷を解かせ

待つてゐる

隅のベンチに小さくなつた少女

狭い二等室に威張つてゐるラツコの襟の外套の大男

百姓の兒らしい小學生（學帽にカスリの着物、足袋跣足、腰にふろしき包み）

私は寒さにふるへ乍ら、淋しく

見知らない人々の冬の姿を見てゐた

お前の胸の氷を
 お前の胸の氷が溶けたらば
 楽しい歌が生れるだらう
 氷を解かせ、氷を解かせ

胸の蟠り

胸の蟠り
 それがとれたら
 楽しかった
 胸の蟠り

お前の爲す仕業は
 本當に恐ろしい
 疾妬や、憎悪よ
 それがとれたら
 此世は楽しくなつた

小景

妻が七厘に、夕の飯の釜をかけて、自分に焦げないやうに、焚けたら下ろしてくれと頼んで町へ使ひに行つた。僕は焦がしてはならないと思つて、障子を細目にあけてそこから戸外へ出してある七厘の方を注意しいく、讀書して居た。もう焚けはしないかなと思つ

て見ると、炭がすっかり燃へて火の色が實に美しいのにをどろいた。七厘も今沸騰して飯が出来さうになりかゝつてるところで、白い湯気が、木の蓋を中から少しゴト／＼動かす白い汁が蓋の間から溢れてこぼれる。その素焼の赤い釜と火のやうになつてゐるやはり素焼の赤い七厘とが、まるで大きな寶玉のやうに燦然としてゐるので、自分をつく／＼と見惚れた。それは原の中で周囲の空氣が塵一つなく、澄んで牙へ／＼してゐる故だ。自分はこんな安つほい一個の物質が、單に物質としたら實に價値の無いものであるが、それが大きな靈的な大氣の中では、とつとも無い美に見へる事を發見して讚嘆した。然うして長與の「雨漏り」の詩を思ひ起した。あの詩は實に面白い、今思つても微笑みが湧く詩だ。いろ／＼の陶器が雨うけのために室に並べられたところへ、長與が餘り家族が賑やかに面白さうに騒いでるので、出て来て見ると、その有様なので呆氣にとられて、驚く。然うして、朝鮮の高價な壺も臺所のおさんどのやうな摺鉢もそこでは堂々として美を發揮してゐたと云ふ骨子の詩だが、あの詩は本當に眼に見へるやうにあの望月の晩のわか雨の雨漏り

で一家總出で狼狽する親はしい光景が無駄がなく、一聯一句、秘密な心の働きで、表現されて居た。氣品のある美しい詩だ。専門の詩人をして顔色なからしめる詩だ。今年も多く詩を見たがあつた詩位の詩はどこでも見られなかつた。と自分は思つた。

小景

河原の洲の中で草に休んで、河向ふの畠で、靜かに働いてゐる百姓の遠い姿を見る。麥蒔きでもして居るのか、畠の中を往つたり來たりして居る。景色の中で働いてゐるのは彼獨りだ。外の畠には農夫の影が見へない。収穫の終へた十一月の畠は寂しく靜かだ。或る畠は土が黒々と太い畝の線が美しい。或る畠には藁塚が積れ、或る畠には野菜が、霜枯の中に一點の緑を點じて居る。こゝに見へる材料は悉くシンプルで善良の感じがする。自

分はミレイを思ひゴツホを思つた。

草 枯

家の前の原がすっかり黄色く枯れた。原の向ふの畠や木立が、雨風に曝らされて、汚らしく、田舎めいて、霜枯れの佗びしい風景だ。風の吹かない日でもそこらが白け切つて、うつろな感が漂つて居る。實に静かで土は眠つてゐるやうだ。活動がまるで静止して居る日光は潤澤だ。ボンヤリ日南ほつこして遠山を見乍ら、手隙きの妻と、冗談を云つたり、人の噂をしてゐる。

笹 鳴 き

家の裏の小さい谿に添つて杉と檜の青々とした叢林がある。谿に成つた崖には、葛や、茨や、薄や雑草の枯葎で、そこへはよく小鳥が来る。腹赤や頬白や蒼雀等が来る。此間まで茨のルビーのやうな紅い實が結つて居たが、もうすっかり食はれて了つた。夕方、きつとその谿の鍍の中でチャツチャツと笹鳴きが、慌しなく、夕暮の歌をうたふその聲が冷たい身に沁む空気に響いて、枝移りし乍ら、身を轉じつゝ「チャツ、チャツ」と啼いてゐるのが間近かにきこえる。あの聲はへんに好きだ。子供の頃を思ひ出す。……

冬に

寒さが遣つて来た
けれど私は狼狽しない
私は楽しく御まへを迎へる
私の準備は整つた

冬に

荒寥としたこの田舎

冬は私の心ををびやかす
しかし私は戦はう
老勇士のやうにね

散歩

日が秩父の山の方へ沈んだ
静かに穏やかに
たゆたふことなく
然うしてこの平原の隅の
山の麓の小さい町の

ゴタ／＼塊つた家並に燈火がともり
河の方から霧が湧いて

巾廣く宙に棚曳いて

その暮色と霧と微光の中に

戸數二千餘りの平原の一隅の町は渾然として

私が立つて見てゐる崖の上から

二丈有餘の杉の林が轟々と嚴かに聳へた間から

その生活の營みの聲が

親しく、懐しく

河瀬の音や人馬の音にまじつて

しかし爽やかな靜かな巖然たる暮色の幕を通して

かすかに、親しく響いてくる

さあ歸らう

霧が一ぱい地を罩めた

私は一步一步暮れてゆく靜かな道を

身に泌みる空氣の中を

私の胸に反響する目の前の景色を楽しみ乍ら

快く楽しい心を抱いて野を横切つて家へ歸る

畠の畝のすばらしい線

緑が乏しくなつた周圍に

葱や蔬菜の澄んだみどりの

浮き立つやうな鮮やかな色

愛らしい菜園の眺め

質朴優美な枝ぶり面白い枯木

枯草の小徑
凡てが情け深く美しく
私の胸に反響し
私の胸を反り返へらせ
私は腰をのばして愉快に歩く

藝術品

藝術品に大切なものは
生きた氣品だ
氣品のない藝術は

賞讃しにくい
自然を見ると
氣品のゆたかなのにをどろく
どんな小さいものでも
氣品があつて
その美に優劣がないほどだ
人間の造るものでは
氣品のあるものと
氣品のまるで無いものとの
優劣は實に一目瞭然である
自分は強い精神の生きた氣品の高いものを讚美する

夜

夜、何かゆめ見て
 目がさめるとへんに淋しい
 目が冴へてしまつて眠れない
 起き出して机の前に座つてゐると
 元氣に成つた
 やりたいことがゾク／＼頭へのほつてくる

友達

友達に會ひたくなる
 心を寛げて話したくなる
 たまには仕事を終へたあと等で
 心を寛げて話し合ひたい
 いゝ友達と

友達

友達には感謝する
 いゝ友達がゐなかつたら
 どんなに淋しいだらう
 しかし自分は孤獨も好きだ
 男らしく、堪へ忍んで
 仕事に熱中してゐたい
 孤獨なるものよ
 汝は大なり

生ぬるい幸福

生ぬるい幸福より
 むしろ強い孤獨が自分に
 仕事をさせる

大なる人

大なる人は皆んな
 孤獨で、生きたのだ

仕事をもつ人は
 どうしても孤獨だ
 孤獨の中に愛が湧く
 孤獨の中で反省は得る

いゝ仕事

いゝ仕事は孤獨から生れる

寒い風

今日は寒い風が
 家のまわりでザア〜と音立てゝ
 渦を巻くやうに吹いてゐる
 方向の定らないやうにぐるぐる廻つてゐる
 その音をきいてると冬だ、何かやりたい

小さい龍巻

小さい龍巻が

道の上でクル／＼と

落葉を集めてころがしてゐる

だん／＼渦が夫きくなつて

遠ざかつてゆく

遠くの木立が揺れ出した

まるで地に落ちた悪魔が呪ひをして

逃げてゆく様に渦がだん／＼大きくなつて

空へ巻きあがつて消えてゆく

大望

私は今「大なる歌」に着手してゐる

「大なる歌」とは私の宇宙の認識の歌である

私は偉大な先驅者や哲學者の認識より以上の高く廣く深い認識へ達したいと思つてゐる

私の「大なる歌」は

ニーチェが「ツアラトウストラ」を歌つたやうに

ホイットマンが「草の葉」を歌つたやうに

ダンテが「神曲」を、ゲーテが「フワウスト」を歌つたやうに

宏大無窮の宇宙の神秘の認識を

私の「大なる歌」は歌はうとするのである

私は靈感に鼓舞されて、敬虔な念に打れつゝ
 この「大なる歌」に着手し初めた
 私はいつそれが完成するか知らない
 私の今書いてゐるものはこの一部分である
 私はこの「大なる悦ばしい歌」を早く完成したい

自分の歌で

自分の歌で

全人類を兄弟のごとく

一つの聖なる旗の下に呼び集めるやうな

詩人となりたい

〇冬の夜の詩作

親しい楽しい冬の夜
 家へ歸ると、僕は熱心に詩を書くのだ
 僕はかじかんだ手にペンを持ち
 頭の中の熱火で眼が霞むのもかまわず
 机に向つて、情熱に充ちた胸から
 充奮した頭から
 壯大な詩を、無雑作に

ペンをギシ／＼と音させて書くのだ
 僕はあら／＼しく書き損ひを破り
 新しい原稿紙にまづい字で、書くのだ
 僕は叫びたくなり、手をふり廻したくなつて
 ペンを持つた手を
 敵に戦を挑むやうに頭の上に持ちあけて振り廻すのだ
 僕は油の入つた輪轉機のやうに
 ガタ／＼亢奮して、軀を震はせ
 机をゆさぶり、唸り乍ら、詩をかくんだ
 僕はうるさい位、あとからあとから
 出てくる文句を紙に書きつけてゆく
 こんな愉快を知らない

僕はもう明日の糧の事なんか心配しやしない
 僕はこんな時は、善良で、快活で
 友情に満ちてゐて
 僕は若し盗坊が入つて、僕の品物を今
 目の前で黙つて持つていつても願みないだらう
 僕は今生の最高潮に達してゐるのだもの
 何が出て來たつて驚きはしない

僕の詩

僕は僕の詩が拙劣で

磨きのかゝつたものでない事を知つてゐる
それでいいのだ

僕は、磨きをかけようとしもないのだ

僕の頭から生れたものを固く信じるのだ

二度と之れは書けないのだ

生きてゐる事

僕は時々自分の生きてゐる事が

嬉しくて、世界が楽しくて

泣き出したくなる

僕は愛したいのだ

誰でも關はず愛したいのだ

人も亦僕を愛してくれるのだと思つて疑ひたくないのだ

心の喜び

僕等の心が喜びにをどるのを

若し輕蔑する奴があつたら

僕等はあべこべに彼等を氣の毒だと思ふだらう

僕等の元氣なのは云はれない事でないのだ

海

海よ

力の海よ

太陽を養ひ、星を生む海よ

剛健な民族を生む母なる海

ヴィナスの海

パイロンの光榮の頁を飾る海

船をその腕に巻き込む怪力の海よ

熱き孤島と、雲と、鷗の海よ

移民の海よ

紐育から携帶者の渡つてくる海

女優を連れたサンフランシスコの紳士が物見遊山の航海

月の夜に出没する海賊と密藏船の海

南に北に東に西に間斷なく流るゝ潮流よ、幾多の岬よ

冒険と勞働と奇蹟に富んだ海よ

親しい海の動物よ、正覺坊よ、あざらしよ

巡遊する壯大な鯨と鯡の大群よ

少年の日の夢に汝はいかに楽しき幻の世界だつたらう

空 氣

空氣！ 空氣は神聖だ

誰も見ない、此の不死の大氣

吾々を取り巻く純粹の空氣

夕暮の靈鷲とした空氣、朝の爽味の空氣

山岳を優しく横はらせる神秘な空氣

粗野な溶爐を包む天的の空氣

眼に見へぬ靈氣、ブレークの空氣

澄んで静かで限り無きよらかで

微笑を漂はす未知の空氣

星をブリヤントのやうに煌らかし

新月を聖らかにとり巻く

天國のやうな靈然たる空氣

私達の肺臓に満ち消す

海洋を壓する空氣

小鳥に歌を、花に香りを與へる空氣

不思議な空氣、私の感覺を生々と澄澗とさせ

神秘に眼を輝やかさせる廣大の空氣

落葉

木から散りゆく木の葉を見て
 私は安らかに思つた
 私の肉體も地へ
 靈は天へ歸るのだらう

偉大な仲間

大宇宙に生れ出た、偉大な仲間の

太陽、月、地球、星
 それらの運命は如奈うなるのだらう

星よ

星よ
 地球の友達よ
 君達の方にも人類はゐますか
 君達の方の生活はどうですか

月

太陽が見へなくなると
 月は悲しい零落した姿で
 お隣りの地球を訪ねてくる
 地球は哲學者のやうな顔をして
 偉大な死の友を眺める

寒 月

カン／＼と凍つて固まつた田舎道
 寒月に照らされて歩く
 寒い、たまたまなく、寒い
 けれども空は肅として晴れ
 月は嚴かに皎々と照りわたり
 星の運行が實に美しい
 大きなきよらかな夜に鼓舞されて
 私は霜を浴びて静かな道を逍遙する

田舎にゐること

田舎にゐると

矢張り新聞や書籍に憧れる

馬鹿々しい世間の事知らずにあたいと思ふが

新聞を見ないと気が済まない

社会へ餓へるのかしら

宇宙

俺は宇宙の片隅の

地球に生れた男

地球の中の片隅の

大洋の中の細長い島

日本に生れた男

俺はこゝで地球の人類の中の

一民族の日本の人間界のことを考へる

それに飽きると俺は他の民族のことを考へたり

地球の仲間の星を見たり、月を見たりして

宇宙の廣い息を吸つて
 宇宙萬歳を唱へる男
 大きくなつたり小さくなつたりする愉快

頭

私のこの小つほけな少しの黒い髪の毛に蔽はれた頭の中は
 又何て大きな廣大な迷宮なのだらう
 この内には大宇宙がある
 神があり悪魔があり
 太陽、月、星、人類

全世界の美しい國々や大洋や島や
 天國の夢や地獄の憑れた光景や
 女や男や子供や花や、樹木や
 山や、河や
 宗教、哲學、化學、經濟、天文、美術の
 智能と、心靈と、詩學と
 無限な宇宙がこの頭骸骨の中に
 ちやんとその部門々に分たれて
 混沌として居たり又整理されてゐたり
 いや大變な生きた頭なのだ
 俺はいつになつたらこの頭を整理出来るか
 いつに成つたらこの頭に飽きてしまふか

俺はこの頭を立派な人類の偉大な頭脳にする事も出来るのだ
この奇蹟の詰つた頭め!

都會から離れ

都會から離れ、客間の談話や
新聞やカフェや、電車や
あらゆる書籍から去つて
不毛な川舎の寂しい
きよらかさと孤獨の中で
私は美しい楽しいものを見出してゐる

無人な、荒れた、幾日も雨の降らない
山の乾燥したやゝ氣味の無い
土の膚の色や、よごれた松や
淋しい元氣の無い木立や
枯草や、深い荒れた峽谷や
霜と、雪と、風と、薄日の中で
さう私は遠く流行から去つて
贅澤と文明から遠く去つて
この荒れた冬枯の田舎の埃の中で
私は飾り氣なく、さつぱりと
自分を取り戻し、迷ひを捨て、
健全に自信と勇氣が

苦しみの中から湧いてくるのを感じる

田舎で

私は幾日も人に會はない

私は妻と子供としか愛を分けない

最も單純で最も飾り氣のない、最も親しく卒直な

妻と子供と、しか私は會はない

寂寥、夜も晝も

私の周りには聲がきこえない

私を悩ますもゝの聲はきこえない

私をいら／＼神経質にさせる聲がきこえない
都會の足音

あの馬鹿氣た騒々しさを

もう何ヶ月もきかないのは

私の幸福だ

では何で私はこゝで満たされてゐるのか

私はこゝで星の友だ

毎夜、私は氷れる地の上に天の壯嚴な、美しい星の友だ

毎日、静かな薄日の林の底で

枯草の野原の友だ

石の多い、落葉に荒れた山道の友だ

私の血はこゝで凍へはしない

私の心はこゝで熱を奪はれはしない
 おゝ私の心はこゝで無限の領分へ
 楽しく、鼓動し

いぢけも、陰気にもなつてはゐない

私はこゝで大なる者の友だ

聖者の友だ、太陽の友だ

もう私は賤民の友ではない

私はツラアトウストラの友だ

私は大なる者の力の友だ

無限の内に鼓動する力の友だ

目に見へ無い力の友だ

それは諸君の方へも流れてゆく

目に見えない力の親友だ

町で見た小景

長く患つてゐるやうに

恐ろしく顔色の青白い

瘦せた脊の高い青年が

悲しげな微笑を浮べて車に乗つて通つた

喉には白い布を巻いて

ノロノロ歩く俣の側を

せつかちについて行く老けた女はその母だらう

病院の歸りかしら

今日は先生から少しは慰めのある言葉をきいて

やゝ安堵して家へ歸るところなのだらう

老ひた車夫と母は何か話してゆく

きつと息子の病氣の事を嘆いて話してゐるのだらう

こんな光景は珍らしくもないから恐い氣がする

母の寫眞

古るほけた母の寫眞を

時々出して見る

しげくと眺める

淋しい夜

久しく會はず

御達者なれ

自由

本をよめる

自由な時間

ありがたい

散歩出来る

自由、感謝する

今の世で誰もが得られてゐない

自由だ

それだから貴いのか

皆んなが少しづつ

この自由な時間を

享樂出来るやうになるといふな

朝から晩まで働きづめはひどい

自由な時間をどんなに欲しい人が多からう

肉體も魂も自由に

休息する時間

それは働くことより

或る意味で尊い時間だ

自由

うまい自由を考へ出して

くれた人に感謝すべし

哲學者とはこんな仕事

する人だと思つた

人類を讚美す

英雄

私は彼を讚美する

人類の主腦、民衆の良心

偉大な頭腦

自信が強く

正義に燃へた

歡喜の天才

説教者、演舌家

かゝる人の背後には神があり

その人は彼の偉大な憑れた頭腦から

心臓の命する聲を鳴り響かす

民衆は彼を尊敬し

彼の説く眞理に傾聴し

彼の福音に服従し

彼の手に導かれる

自分がかゝる主腦者を讚美する

かゝる、人類の戦手を讚美する

併し自分は亦かゝる神秘的な人の

現はれた時もあはてないで彼の藝術の熟練發達に

刻苦する天才を讚美する

自分は人類のあらゆる選手を讚美する

一技一藝に卓越した人を
思想家を、聖者を、科學者を

人類の幸福を増進する

貴い腦の人、手の人、良心の人

を自分は讚美する

音樂家も畫家も、詩人も戯曲家も小説家も

又偉大な政治家も

民衆の味方の闘士も

聖者も、哲學者も

日本よ

その道々の勝れた人を生み出し

その人々をして彼の光ある道を行かしめよ

此世は

此世は勞役するところではなく

自由を得て樂しむところでないかな

怠け者の云ひ草かしら

幸福

此世を幸福にするように

考へることは哲人の務めだ

詩人はその楽しさを歌ふのだ

冬

冬、おう怒號する冬よ
 夜の凧よ、雪よ、霰よ、雹よ、霜よ
 私達を威やかす憎い冬よ
 けれども晝間、風がやみ
 空氣が和んで、太陽が温く
 崑を照らす時、雪を頂いた遠山も
 暢氣な顔をした青空に顔を出す

こつちも寒さを忘れてゐられる幸福
 いくら冬がひどくいぢめても
 閑靜な顔してゐる自然の楽しさ

不死

私とは死ぬ者である
 けれど我々は死なないものを
 感じられるものである
 インモータリテイの、美を感じられるものである
 それで有難い

偉大であれ

偉大であれ

素晴らしく偉大であれ！

我々の空気を清くし、高くし、擴け

神秘で未知な

新しい現實の中に生かせ

習慣に依つて弱くなつた智性や感覺を

更に潑刺として躍らせる

靈氣豊かな世界をつくれ

死者は墓の中にはかり無い

未知の量

未知の量が

大切である

無限、神秘が

此世に澤山ある

彼らを甦らせるのは

詩の力である

詩こそ働く力を

人の精神に與へるものだ

人間を取巻く
未知の靈的作用が
美を生む

感 覺

吾々は物質界の約束に縛られてゐる
けれどその常々の既知の唯物觀を
一歩躍み超へたところから
私の感覺は活々と働く
生命の神秘、私はそこに寶 見る

冬 の 蝙 蝠

小さい蝙蝠が
冬の新月の夕べの空に
どこからか飛び出して
うい／＼しく飛び廻つてゐた
その姿が可憐だつた
冬の蝙蝠、へんに神秘的な感じがした
蝙蝠は新月が好きなのかしら
見てゐると靜かな楽しい氣がした

心境

凡人が一生かゝつても

経験されないやうな

強く凄い経験を

天才は常住の世界でしてゐる

ドストエフスキーやブレークのやうな

異常の心境に

凡人は生きるのに耐へられない

日本の心境小説等の呑氣さ

常に心が戦いてゐるやうな

ストリンドベルグの凄さ

ホイットマンの靈感

本當に神から托されたやうな

人の胸を撃つ異常な詩

去勢されたやうな藝術は多いが

恐ろしい藝術の生れない日本

微温的な常識と無良心の藝術

皆んな心境の夢を破らうぢやないか

ホイットマン

ホイットマンは書いた
 彼の流儀で、神の言葉を
 ドストエフスキも、トルストイも
 彼等を讃へるのは
 彼等の神を示してくれたからだ

トルストイ

トルストイは
 もう自分には神のやうな
 人に思へる
 神に自分を捧けて
 神になつた人のやうに思へる

人類は

時に人類は

大きな人を生む

何千年に一人か二人と云ふ人を

世界を脊負つて立つやうな人を

どこの國の人からも遠く敬はれ

父の如く慕はれる人を

日本よ、汝もそんな人を生むだらう

冬

冬は清い

冬は嚴かな時

春夏秋の精氣をぬいて

天地の清まる時

凜として犯し難い美しくしむ

冷静に

冷静に考へよ

汝燃え易い感情を

意志で制御して統一せよ

然うして冷静に考へつゝ

忠實に仕事せよ

汝の熱した頭を冷静に統一し整理せよ

汝はそこから必つと得る所が多いだらう

ドストエフスキーの顔

憑れたやうな、苦しんだ

無限に苦しみから解放されないやうな

あの悲し氣な、嚴肅な顔

私はベエトウエンとドストエフスキーとトルストイの顔が

一番好きだ

苦惱を通して喜びに輝く顔だ

どこにも俗ほいところのないあの深刻な顔

トルストイの善良な、しかし怒つたやうな

長い厚い眉毛の下から

炯々と輝く神の眼のやうな顔の恐ろしさ

老人から若者へ

昨日はあんなに元気だった若者が

今日はすっかり元気が無い

何か理由があるに違ひない

愛人に反かれたのか

親の遺産を受けそくなつたのか

氣にかゝる面の憂ひ

可哀相な若者よ

もう苦勞がおまへの若さを曇らし初めたのか

元氣なれ、若者よ

氣を滅入らせて悪い景見にとりつかれるな

俺だつて若い盛りには

もう此の世に身の置き場がないと思ひ詰めたものだが

今ではこの通り元氣で丈夫で

子供の四人もある快活なおやぢだ

辛抱せよ、若者よ

廣い世界に女は他にいくらだつてある

こんなおやぢの忠告も

今は腹が立つ程不誠實にきこえるだらうが

それも一時だ

辛抱だ、辛抱だ
 楽しみもあり苦しみもあり
 それで人生が強い人にとつては
 一番生き甲斐のあるところとなるのだ

小景

凄い月が昇つてゐる
 嵐のあとの地上を照らし下
 出水に浸つた畠や村の上に
 缺けたところが恐ろしく黒く

月を鏡にして悪魔が姿を映してゐるやう
 だんく月の半面が暗く蝕ばんでゆく

新月に

月よ

汝、天上の放浪者！
 今汝が遠い旅より歸り來つて
 遙かに勇しく

我等の視界に一すじの光りとなつて入り來るのを迎へる
 おゝ新月よ

汝はいかに遠く夜もすがら歩み來りし
 幾月も幾月も人寰を離れたところに
 神は汝ををくりたまへる
 いかにも物凄しい海を渡り
 悲しき海の咆吼する獸を慰め
 いかにも淋しき砂漠をさまよひて
 獅子の兒の生み落つるのを見守り
 いかにも久しく苦行して來たりし
 汝の身の細りて窶れし姿は
 昔の地上の聖者にも似て
 痛ましく、汝の旅路の辛苦を語りて
 汝の氣高く優しい光は勿體なく拜まれる

おく月よ
 暫しこの地にとまりて圓らかに肥へて給はれ

長閑な冬

長閑な冬だ

一日日に温り乍ら

島の方で晝をかいてゐる楽しさ

心が軽くなつて

思ふことも夢のやうだ

正月が近づく

正月が近づく

クリスマスの買物に

奥様やお嬢さんで銀座はさぞ賑やかだらう

もう正月の松も立つて町を美しく裝飾してゐるだらう

不景氣を知らない人達には

楽しい年の暮である

自分は郊外の小さい家で

コーヒーを飲み乍ら友達と

火鉢をかこんで人の噂や仕事の話をして

貧乏に襲れて、それでも楽しく暮らしてゐる

蜜柑と林檎

蜜柑の美しさ

冬の果物の有難さ

暖い黄色い色が

海のほとりの産地を思はせる

林檎は北の産地を、蜜柑は南の産地を

楽しい冬の果物よ、自然は矢張傑いな

畠の方へゆくと

畠の方へゆくと
 スキートな空に
 圓い雲がいくつも浮遊してゐる
 可愛ゆい感じがする雲だ
 陽が當つて畠の菜が黄ろく萌え
 遠く小さい森の木々が
 褐色や黄が交つて美しい

圓い雲

平野の上を浮遊してゆく
 圓い雲よ
 悠々とした旅の雲よ
 どこへゆくのか
 畠を越え河を越え
 山を越えてゆく雲よ
 あゝ世界は平和で美しい
 遠い國へ憧れが湧く

桃 桃
 梅 と 鶯
 土 筆
 雪 の 曙
 春 の 曙
 雲 雀 籠
 河
 桃
 冬の夜道
 春の黎明を歌ふ
 早春の散歩
 雨

索引

一 一
 四 一 七 七 六 六 五 五 四 四 三 二 一

河 太 桃 梅 春 青 梅 桃 春 太 河
 春 陽 春 梅 春 青 梅 桃 春 太 河
 の 神 は 春 梅 桃 春 太 河
 曙 來 來 空 曙 曙 曙 曙 曙 曙 曙

二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 一 一 一 一
 五 四 四 三 三 三 三 三 〇 〇 九 八 六 五

董 桃 母 蓄 櫻 櫻 花 花 土 春 春 春 梅 梅 曙
 の
 聲 薇 筆

三 三 三 三 三 三 三 二 二 二 二 二 二 二 二
 四 三 三 二 一 〇 〇 九 九 八 八 七 七 六 六

自然よ 野の兎 春の朝 雲雀 雲雀 雲雀 春の日永 自然 月 生花 樹木 生命あるもの 貴いもの 樹木 生きるよろこび

一三三 一三四 一三六 一三七 一三九 一四〇 一四〇 一四一 一四三 一四四 一四五 一四五 一四六 一四七 一四七

生命を 桐の花 青葉 路を歩き乍ら 青葉の庭 生 命 小さい並木 木々 花賣り 樂しく 子供と犬 子 供 途上 初夏

一四八 一四八 一四九 一五〇 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五三 一五五 一五六 一五七 一五九 一六〇 一六二

女 若葉 夜の道 夜かへる友 友の妻 金の魚 家の周り 樹々よ 麥の夜 桐の木 桐の木 笛 麥 初夏

一六二 一六三 一六四 一六五 一六六 一六七 一六八 一六九 一七〇 一七一 一七二 一七三 一七四 一七五 一七七

秋 春 友よ 花 春が来た 何の花か 野の少女 春の夜 春の夜 愛する人達 私の詩は 一人の日 人々は 日の光 夕暮

三六 三七 三八 四〇 四〇 四二 四三 四四 四五 五〇 五一 五二 六二 六八 七六

夜 自然に就て 優れたもの 嬰 兒 春の日 男と女 大なる悦び 生の神秘 喜 び 自由 涙ぐむこと 旅 山の中で 天地 自分の生涯

八一 八二 八三 八五 八七 八九 九〇 九一 九八 一〇〇 一〇五 一〇六 一〇七 一〇九 一一一

妻よ 道は険し 詩人よ 心の暗い時 自分よ ミレイ 我は貧し 不幸な人 幸 福 風の 春の 愉快よりも 倫 理 金 何にでも

一一三 一一五 一一六 一一七 一一八 一二〇 一二〇 一二四 一二六 一二八 一二九 一三〇 一三一 一三二

緑の繁み 一七九
 黒い蝶 一八〇
 初夏 一八二
 樹木達 一八三
 花が散つて 一八四
 繁み 一八五
 健康な樹木 一八六
 草 一八七
 樹や草 一八八
 木々は 一八九
 春の夜明 一九〇
 若葉の奥で 一九一
 鶯 一九二
 野の逍遙 一九三
 小景 一九五

夏だ 一九六
 愛するもの 一九七
 震災の思ひ出 一九七
 震災の思ひ出 一九九
 平和 二〇〇
 喜び 二〇一
 星満つ空 二〇二
 小景 二〇三
 秋 二〇四
 夕焼 二〇五
 星 二〇六
 月と星 二〇六
 我が家 二〇七
 秋が来たたら 二〇八
 妻の傍に 二〇九

子供は 二二〇
 一家揃つて 二二一
 コスモス 二二二
 涼しい朝 二二三
 月見草 二二四
 蝶の眠 二二四
 暑い日 二二六
 意志の弱さ 二二七
 朝顔 二二八
 小景 二二九
 庭の草 二三〇
 涼しい朝だ 二三一
 蟬 二三二
 頭が濁る 二三二
 夕映 二三三

二二〇
 二二一
 二二二
 二二三
 二二四
 二二四
 二二六
 二二七
 二二八
 二二九
 二三〇
 二三一
 二三二
 二三二
 二三三

自然のごとく 二二四
 月と河 二二四
 夏の河 二二五
 溪流 二二六
 蟬 二二七
 星 二二九
 晝の月 二三〇
 つくばね朝顔 二三〇
 月夜 二三一
 月夜 二三一
 都市 二三三
 夏市 二三四
 餓 二三六
 星 二三八
 朝のよろこび 二四〇

暑い 二四一
 野生の花 二四三
 ふくろ 二四三
 小景 二四五
 青いスイチヨ 二四六
 夫婦揃つて 二四七
 夜 二四七
 夜の子供 二四八
 草原 二四九
 朝の清さ 二五〇
 海 二五一
 汽船 二五一
 草花 二五二
 渡來の花 二五四
 小景 二五五

或る時 二五六
 町の夜 二五八
 がちやくよ 二六〇
 スケツチ 二六二
 愛に燃えたもの 二六四
 自分は自分で 二六五
 罪深い自分は 二六五
 神の聲は 二六六
 やさしい心を 二六七
 やさしい平和 二六八
 善には 二六八
 まごころ 二六九
 責められると 二七〇
 理屈も何も 二七〇
 力強い 二七一

二五六
 二五八
 二六〇
 二六二
 二六四
 二六五
 二六五
 二六六
 二六七
 二六八
 二六八
 二六九
 二七〇
 二七〇
 二七一

美しい娘 三五七
 少女を見て 三五九
 眠りよ 三六〇
 秋 三六二
 月夜には 三六七
 月夜 三六八
 朝の空 三六八
 朝の空 三六九
 この澄んだ空気 三六九
 戸を開けると 三七〇
 夕暮 三七一
 冬 三七四
 或る秋の日 三七四
 秋 三七八
 秋 三八二
 秋日和 三八四

秋の小川 三八六
 落葉 三八七
 朝寒 三八八
 虫 三八九
 月夜 三九〇
 月 三九二
 新らしい頁 三九二
 一つの星 三九三
 一寸したこと 三九四
 悦びを與へる 三九五
 静かな晩 三九五
 秋の消息 三九七
 秋 四〇〇
 秋 四〇一
 小學校の側を通つて 四〇三
 落日 四〇四

秋の山林 四〇七
 冬の夕暮 四〇九
 池 四一〇
 静かな日 四一一
 山々 四一二
 冬の景色 四一三
 世の知らない高さ 四一四
 事を知れる人 四一四
 毎朝 四一五
 知らざる事 四一六
 内にものを聴き 四一六
 星 四一七
 ハムレットよ 四一八
 カント 四一九
 星 四二一

自然 二七二
 梅の木 二七四
 菖蒲 二七五
 蟬 二七六
 木々の姿 二七七
 子供 二七八
 夏 二七八
 樂しみ 二七九
 友 二八〇
 友心 二八一
 安 二八一
 友 二八一
 母 二八二
 母 二八二
 菊 二八三
 秋の讚美と詩人の役目 二八六

海の小景 二九二
 友が死んだ 二九三
 働いてゐる人 二九六
 初秋の庭に 二九八
 秋 二九九
 散歩の途上 三〇四
 雨の夜 三〇六
 父が生きてゐる 三〇七
 夕映 三一〇
 喜び 三一〇
 樹木よ 三一〇
 或る晩 三一四
 しやむの娘 三一六
 秋の花 三一六
 夕暮 三二〇

郊外の道 三二一
 消息 三二二
 消息 三二二
 幸福なりし日 三二五
 案山子 三二五
 秋の月 三三二
 朝霧 三三三
 百舌 三三三
 御祭見物 三三三
 カフェ 三三六
 乞食詩人 三四〇
 不便な田舎へ旅し 三四一
 詩作 三四二
 朝起きる 三四二
 冬の太陽 三五〇
 三五三
 三五五

小景 氷を解かせ 胸の蟠り 小景 小景 草枯 笹鳴き 冬に 冬に 散歩 藝術品 夜達 友達 友達 生ぬるい幸福

四七四 四七五 四七六 四七七 四七九 四八〇 四八一 四八二 四八二 四八三 四八六 四八八 四八九 四九〇 四九一

大なる人 いゝ仕事 寒い風 小さい龍巻 大望 自分の歌で 冬の夜の詩作 僕らの詩 生きてゐる事 心の喜び 海 空 氣 落葉 偉大な仲間 星よ

四九一 四九二 四九三 四九四 四九五 四九六 四九七 四九九 五〇〇 五〇一 五〇二 五〇四 五〇六 五〇六 五〇七

月 寒月 田舎にゐると 宇宙 頭 都會から離れ 田舎で 町で見た小景 母の寫眞 自由 自由 人類を讚美す 此世は 幸福 冬

五〇八 五〇九 五一〇 五一〇 五一二 五一四 五一六 五一九 五二〇 五二一 五二三 五二四 五二七 五二七 五二八

小さい汽船 冬の夜の嵐 冬の星 朝寒の山 同一回歸 神 冬 海 横濱 海 自分よ 温い田舎 俺の詩 田舎で

四二二 四二三 四二四 四二五 四二六 四二八 四二九 四三〇 四三〇 四三二 四三四 四三五 四三六 四三七 四三八

雲 冬の月夜 冬の 冬の日暮 日の出 小景 子供 俺の子 冬の道 元日に 山頂の雪 手と手 ねじけ者 雲

四三八 四三九 四四一 四四二 四四五 四四六 四四八 四四九 四四九 四五〇 四五〇 四五二 四五三 四五五

冬の日 木枯 冬の小景 霜月夜 星 星 冬の月夜 冬の月夜 冬の夜 自分の愛す詩 見へざる者 汽車 天 人 悲しい晩 或時

四五七 四五七 四五八 四五九 四六〇 四六〇 四六一 四六一 四六二 四六三 四六四 四六五 四六六 四六七 四六八

不 死	五二九
偉大であれ	五三〇
未知の量	五三一
感 覺	五三二
冬の蝙蝠	五三三
心 境	五三四
ホイットマン	五三六
トルストイ	五三七
人類は	五三八
冬	五三九
冷靜に	五四〇
ドストエフスキの顔	五四一
老人から若者へ	五四二
小 景	五四四

新月に	五四五
長閑な冬	五四七
正月が近づく	五四八
蜜柑と林檎	五四九
島の方へゆくと	五五〇
圓い雲	五五一



大正十五年七月十五日印刷
 大正十五年七月三十日發行
 〔定價貳圓貳拾錢〕

著 者 千 家 元 磨
 東京市神田區淡路町二ノ三
 發行者 下 中 綠
 東京市外野方町新井二六〇
 印刷者 野 村 孝 太 郎
 印刷所 野の百合社印刷部

東京市神田區繩町三ノ三
 發行所 平 凡 社
 振替東京二九六三九番
 電話神田二〇四七番

1974
12

517
366

終

